



いわて医療通信

【加齢に関連する眼の異常】

4. 加齢黄斑変性とは

けてしまっ
たりしまし
た。そうな
ると、治療
前と変わら
ない、もし

加齢黄斑変性は、文字通り「加齢」に伴って起こる「黄斑変性」です。欧米では成人の失明原因の第1位で、日本でも第4位となっています。「黄斑」とは眼底の中心にある、眼の前方からまっすぐに光が入ってきて網膜にあたる中心部位のことを言い、ものを見るために中心的な役割を果たす部分のことです。黄斑が変性すると視野の「ど真ん中」が見えなくなりま

す。視線を動かしても、ずっと真ん中は見えなままです。視力は0.1未満になります。困ったことに、眼鏡でもコ

ンタクトレンズでも白内障の手術をしても、それ以上に見えるようにはなりません。

「加齢黄斑変性」は黄斑に病的な「新生血管」が侵入してきて出血や網膜剥離を起す疾患です。若い人

には見られず、日本では高齢男性に多く、発病の危険因子として喫煙、肥満、長時間の日光暴露などが挙げられます。

加齢黄斑変性をイメージしやすくするために「床下から生えたタケノコ」に

たとえてみます。自宅の居間の床下から巨大なタケノコ(新生血管)が生えてきて、床板(網膜色素上皮)を突き破って畳(網膜)を持ち上げ、居間では生活ができなくなった状態をイメージしてください。居間(視力)を取り戻すためには、この「タケノコを引っこ抜かなくては」と考えるでしょう。眼科医も同じで、タケノコを引き抜く(新生血管除去)、特殊な光線でタケノコを焼く(光線力学療法)などの治療法を実施してきました。しかしながら、これらの治療によって床板にさらに大きな穴が開いたり、畳もろとも焼

くは、さらに見えにくい状態になることがあります。困ったことに傷んだ畳や床板を補修する方法はこれまでになく、これらの治療法は徐々に下火になっていきました。

次号では加齢黄斑変性の新しい治療法について記載します。

岩手医科大学眼科学講座講師
田中三知子

